

広島が語ること

長久保小学校 六年 A・K

実際に見る原爆くドームは、昭和二十年八月六日午前八時十五分のまま、時が止まって
いるようでした。がんじようだったであろう
レンガ造りのかべも、ガレキとなつて、くず
れ落ちたままでした。そんな光景とは対照的
に、広島町は、にぎやかで、外国人観光客
もたくさん見受けられました。

平和記念公園は、緑があふれ、不思議と静
けさを感じました。今年に戦後七十八年とな
りました。今や、当時世界で初めて原子ば
くだんが落とされ、その年のうちに、十四万
人以上が亡くなり、焼け野原になったことが、
信じられないくらいでした。

見学した平和記念資料館では、ひばく者の
写真や絵が展示されています。それらを見る
だけで、すぐきようふを感じるのに、実際
にその場にいた人は、地ごくのような光景を
目のあたりにしているの、どんなにこわく

て、つらいことだったかと思うと、胸がいた
くになります。
たとえ、そこで、その日を生きぬいたとし
ても、原ばくの放射線による「後しようがい
におびえ、未だに苦しんでいる人もいます。
原ばくで亡くなった人と、後しようがい
で亡くなった人を合わせると、今年で三十三万人
以上にもなります。戦争は、理由が何であれ
全ての命がおびやかされ、決して許されない
ことです。

これから私が出会うであろう、世界中全て
の人々に、今回私が広島で見たり、学んだこ
とを通して、戦争の悲さんさや、平和の大切
さ、原ばくのおそろしさを伝えていきたいと
思います。そうすること、一人一人が、自
分事としてとらえられるようになり、「かく
兵器のない世界」へと導き、「平和を愛する
心」、「命あるものを大切にすること」も育つ
ていくのではないでしょう。

最後に、このようなき重な体験ができたこ

と、つるヶ島のはけん事業に参加させていた
だいたことに、とても感謝しています。あり
がとうございました。